



| | |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 大腸癌に対する術前化学療法の効果に関する研究 : 組織学的変化を中心として |
| Author(s) | 福田, 一郎 |
| Citation | 大阪大学, 1983, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/33585 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|---------|------------------------------------------------------|
| 氏名・(本籍) | 福 田 一 郎 |
| 学位の種類 | 医 学 博 士 |
| 学位記番号 | 第 5 9 3 8 号 |
| 学位授与の日付 | 昭 和 5 8 年 3 月 1 7 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 5 条第 2 項該当 |
| 学位論文題目 | 大腸癌に対する術前化学療法の効果に関する研究 —組織学的変化を中心として— |
| 論文審査委員 | (主査) 教 授 神 前 五 郎 (副査) 教 授 北 村 旦 教 授 松 本 圭 史 |

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

大腸癌の手術成績向上の一手段として、大腸癌症例に術前化学療法を施行し、その切除標本の組織像について、化学療法施行前と施行中、施行後の組織像の変化について検討を行い、どのような投与方法を行うべきかを明らかにしようとした。

〔方 法〕

大阪府立成人病センター外科で昭和50年12月より昭和57年8月までに手術を施行した大腸癌 287 例中、術前に Tegafur 坐剤を投与した39例につき検討を行った。

検索方法はまず内視鏡的生検により組織採取を行い、その後 Tegafur 坐剤を0.75～2g/日、総計12～108.5g (平均26g) 投与し、投与中、投与後に繰り返し、投与前に組織検索を行った領域の組織検索を行った。組織像の検索は³H-Thymidineの labelig index, mitotic index, 癌細胞の変性度(北出らの規準を modifyしたもの)で行った。

〔成 績〕

- (1) Tegafur 坐剤投与前に自覚症状を有していた35例中19例(54%)は坐剤投与により下血、テネスマスなどの自覚症状の改善がみられた。副作用に関しては著明なものは認められなかった。
- (2) Tegafur 坐剤を投与した症例で投与前後に autoradiogram を作成し得た 6 例について mitotic index と labeling index の関係をみると両者は相関する傾向にあった。
- (3) Tegafur 坐剤の投与量と組織学的変化の関連性を同一症例で経過観察出来た12例でみると高分化腺癌、中分化腺癌とも投与量が増えるにつれて mitotic index は低下した。また高分化腺癌では投

与前にくらべて投与後に変性度が高度となった症例が多くみられた。

- (4) Tegafur坐剤の投与量別にmitotic indexの平均をみると、高分化腺癌のmitotic indexは投与前には19.8cells/1000cancer cellsであったが、5～10g投与で9.4 cells/1000 cancer cellsに低下し、さらに投与量を増やすと少しずつ低下した。中分化腺癌のmitotic indexは20g以下の投与では投与前とほとんど変わりはないが、21g以上投与ではじめて投与前よりも少し低くなった。しかし、mitotic indexが0になる症例は1例も認められなかった。
- (5) Tegafur坐剤の投与量と癌細胞の坐剤投与前に対する投与後の変性度の変化をみると、高分化腺癌は投与量が5～10gでも軽度変化を半数に生じ、11g以上では高度変化の症例も認められた。ところが中分化腺癌は投与量にかかわらず変性度に变化を認めないものが多かった。
- (6) Tegafur坐剤の投与終了後の日数別にmitotic indexをみると、投与前にくらべて投与終了後3日以内に組織採取されたほとんどの症例は著明なmitotic indexの低下をみたが、投与終了後4日をすぎるとmitotic indexの上昇傾向がみられた。
- (7) Tegafur坐剤の投与終了後の日数別に癌細胞の変性度をみると、投与終了後3日以内に組織採取されたものでは変性度が投与前にくらべて増強されたものが多かったが、投与終了後4日以後では回復する傾向がみられた。
- (8) 腫瘍の肉眼的変化(腫瘍の縮小)は癌細胞の変性度が高度なもの、深達度の浅いものに高率に認められた。

〔総括〕

大腸癌患者の術前にTegafur坐剤を投与した結果、著明な副作用を認めず、かえって自覚症状の改善がみられ、術前に安心して容易に使用可能であることを確認し、さらにこの術前投与は明らかに腫瘍の組織学的効果を示したが、これは癌の組織型、薬剤の投与量により差異が認められ、細胞効果は投与終了後約3日で消失した。この成績はこの薬剤の投与方法に大きな示唆を与えるものである。

またこれらTegafur坐剤の術前投与を施行し、根治手術が出来た33例の累積5生率は83.3%と良好であった。

論文の審査結果の要旨

大腸癌患者39例にTegafur坐剤を術前に投与し、主として生検材料を用いて経時的にmitotic index、癌細胞の変性度を検討した結果、投与量が増加すると退行性変化は強くなったが、とくに高分化腺癌でこの傾向が強く認められた。また投与終了後4日以上経過すると再び増殖傾向が認められた。したがってTegafur坐剤を術前投与に使用する場合、手術直前まで使用することが重要であり、とくに高分化腺癌においてはより効果が期待できるという結果が得られた。価値ある研究と考えたい。